

**anonym2000**



**anonym2000。**

朝目覚め、部屋を見渡し、頭を抱え、電源が入ったままのパソコンの前に座った男が目にした手がかりらしきものはそれだけだった。何の手がかり？ それは男がいったい何者なのかということの手がかりだ。gmailのアカウントに表示されたユーザー名がanonym2000。だから今までのところ、これだけが男のことを称することのできる固有名詞になる。名前、それは確かにあるはずなのだろう。だがしかし、朝目覚めた男の頭の中には、己を指し示すいかなる言葉も見当たらない。

anonym2000。

発音してみる。音を舌の上に乗せる、異常に溶けやすい角砂糖のように、わずかな唾液でさっと流れ消えて、ろくに味もしない。男にとって、その言葉はいくらの親近感も覚えず、いかなる言葉とも並列状態にある気がしている。野田佳彦、レディー・ガガ、裕仁、ムガベ、オバマ、タモリ、そういった名前とanonym2000とは同じような距離にある。しかしさしあたりこれが男の名前になる他なさそうだった。gmailのアドレス帳にはいかなる名前も登録されていない。なのでanonym2000は携帯電話を探してみる。大きな黒いゴキブリのようにして部屋の隅に息を潜めていたそれを発見して拾い上げ、anonym2000は目の前に画面をかざし、見る。アドレス帳にはやはりいかなる名前も登録されていない。だからまたパソコンへ向かい直し、あれなどこれなど掘り探してみる。mixi、twitter、facebook.....男はその全てについてアカウントを持っていた、が、その全てについて何のプロフィールも記入しておらず友人等々の登録もない。

anonym2000は誰かとコミュニケーションを取ろうとしてみる。mixi、twitter、facebook.....アカウントを持つサイトで他人のプロフィールを覗いて、そこに何かメッセージを送ることを考える。しかしanonym2000は結局誰にメッセージを送っていいのか分からない。anonym2000の頭の中には、自分の好みや趣味や仕事というような情報がいっさい入っていないのだ。だから他人の好みや趣味についても価値判断を下すことができず、膨大に登録されたサイト上のプロフィールの中からどれを選び、どんなメッセージを送ったらいいのかなどまるで検討がつかない。とりあえずランダムにメールを送ってみればいいのかだろうか。と・り・あ・え・ず！？ いったい何のために？ 僕はanonym2000です、僕が誰なのか教えてくださいとでも言うのか？ 全く無意味なことに気付いてanonym2000はその試みをやめることにする。

パソコンは何も教えてはくれないとanonym2000は論を結し、服を着て靴を履き、ドアを開けて外へ出る。家の周りなど歩き歩きして、誰か自分の顔を見知る者々など現れないだろうかとすれ違いする人また人に視線を送る。しかしその視線に応える者はなし。誰も！ せいぜいがコンビニの前に座り込んだ不良中学生くらい。anonym2000が送ったのよりも幾十倍は熱い視線を送り返し拳を振り上げて立ち上がったのでanonym2000はそそ、くさ、とそこを立ち去る。どうやら

自分にはろくに知り合いがないのだろうかとanonym2000はため息、外から返りドアを閉め、靴を脱いで服を脱ぐ。

紙とペン、サイコロ、anonym2000は用意したそれらを机の上に置く。音楽、スポーツ、読書、映画、旅行、料理。六つ思いつくままに言葉を書き並べてそこに番号を割り振って、ころろ、ころり、anonym2000はサイコロを転がす、出た目は四、それはスポーツに割り振られた番号だ。anonym2000はスポーツを自分の趣味とすることにして、それをmixi、twitter、facebookなどのアカウントの所に書きこんでいく。同じようにサイコロを転がし、好きなもの、出身地、生年月日などを決めて自分のプロフィールを完成させていく。anonym2000はかりそめにでも、自己像を作ってみることにしたのだ。そして例えばスポーツなど、自分のプロフィールに書き込んだことについて知識を収集してから、今度はそういったサイトにおいて同じ趣味をもつ人間とコミュニケーションを取り始める。こんにちは！ 僕もサッカー大好きです、これこれのチームのファンでこの間のしかじかの試合にもう感動して……などなど。それはなかなか好感触で、いくらかのレスポンスが後に続く。そのうちの何人かとはSNSサイトで友達になることすらできた。

しかし話題はやがてどうしてもanonym2000自身のことになり、そこで言葉は立ち行かず勢いを失い、anonym2000は自らをはぐらかしながら話題を打ち切らざるを得ない。もちろん会話の度に自己像を練り直したりその場で適当に取り繕うなどということはできたのだが、しかしやればやるほどその自己像はいびつで不器用でグロテスクな形になっていき、その姿が膨らめば膨らむほどにanonym2000は尋常でない疲労感に打ちのめされてしまう。

だからanonym2000はそのプロフィールを消してしまうことにした。何もかも、今まで入力してきた全ての情報を消し、せっかく友達に登録できた人間たちも消していく。anonym2000はとても疲れていた。anonym2000という名前以外に何も登録されていない状態になるとすっきりした気分になり、ベッドに横たわる。部屋の電気を消して目を閉じ、深呼吸して眠りに落ちていく。明日になれば何もかも忘れてやり直すことができる。それにはanonym2000という名前さえ残っていればいい。そこからなら何をしても自由だし、どんなふうにすることもできる。だから今日はこのままゆっくりと眠ろう。

おやすみ。

それがこの日anonym2000がつぶやいた最後の言葉で、蒸気のように漂い、やがて跡形もなく闇の中に消えていった。